
俺と幼なじみが勇者になった件

相澤 辰弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼なじみが勇者になった件

【Nコード】

N0506R

【作者名】

相澤 辰弘

【あらすじ】

幼なじみはイケメンでモテモテで天才。何その神様に愛されちゃった感じのスペック。ギャルゲの主人公よりモテる人間とかお前しかいねーよ。

そんな幼なじみを持つ（自称）一般ピーポーな俺ことイーノック（笑）はなんかいい感じに日常を過ごしてた。ちなみにイーノック（笑）なんて名前じゃない。

毎日奴を殴ってセメントで固めて東京湾に沈めたい衝動を抑えながら、そんなストレス（ひがみ）をゲームやマンガやアニメで消費する毎日を送っていたある日。

俺は奴に巻き込まれて異世界とやらに召喚されちった、てへ。

しかもなんか勇者とかやらされるらしい。

そんなめんどくさいもんは奴がやっておけばいいと思いつつ、俺は俺なりに役目的なもんがあるらしいので、せっかく異世界に來たんだからと青春を謳歌することを決めた。

そんな俺が繰り出す異世界反則裏道活劇！ お楽しみに。

モバゲーからの転載です。

レビューとか感想とかどんどん欲しいです。よかったら書いて下さい。指摘やアドバイスはなるべく受け入れる所存です。

ブローグ

今日も今日とてトラブルに巻き込まれる俺は不幸の擬人化上条さんにも負けず劣らずの運命を背負っているんじゃないかと自分の存在に疑いを持ちはじめた今日この頃。

前から迫ってくるスキンヘッドの厳ついヤーさんみたいな人を蹴り飛ばして片を付ける。周りにはそんな感じでぶっ飛ばした奴らが何十人も転がっている。男に囲まれても嬉しくない。

俺の横には何故かへばってる今回のトラブルの発端『朝原 光』が寝転がっていた。

俺の幼なじみのこいつはジャーニース事務所も目じゃないくらいイケメンで頭も良く身体能力も高い。そして性格も誠実で困っている人は放っておけないという神様に愛されちゃったんじゃない？ ぐらいの高スペックを誇る人外。

俺はこんなのを人とは認めない。

対して俺はどこからどう見ても一般ピーポーな人間。時々光から「お前人間か？」とか言われるが、失礼極まりない。俺から言わせ

ると光の方が人間じゃないからな。

そんな俺達がなんでこんなヤーさん相手にやらかしたのかと言うと、隣でへばってる光がヤーさんに絡まれてる女の人を助けたのがきっかけ。その女の人はヤーさん達に不当な利子（よーするに借金してたんだなーこの人）を迫られていた所にたまたま学校帰りに遭遇。

そのまま光が助けに入って近くにいた俺も巻き込まれた訳だ。マジ勘弁してほしい、俺は光のように超人でも菩薩でもないんだから。

「なんでお前がへばってんだよ。さっさと帰るぞ」

俺は光にそう声をかける。女の方はどっかに行った。光と何かしら話してたから警察かもしくは弁護士事務所にも行ったんだらう。

光はけだるげに立ち上がると俺に向かって一言。

「時々思っただけど……悠里ってホントに人間？」

「失礼な。少なくとも光よりはまともな人間だ」

光に肩を貸しながらそう帰す。その質問が出た時のいつものやり取りなので、光から軽い笑いが漏れる。そのまま俺達は家に向かって歩き出した。ちなみに光は俺ん家の隣に家がある。

そんな感じの日常を過ごしながら、俺は概ね平和に過ごしていたはず——なんだが。

「何と言うことでしょう」

ビフォーアフターのな口調でそう呟く。ちなみに発信源は俺じゃない、隣のイケメンだ。

目の前にはなんか白いシスターっぽい（インデックス的な）服を着た水色の髪の毛と瞳を持つ美少女が光を見て固まっていた。その後ろには甲冑？ に身を包んだ騎士っぽい人が多数。そして足元には幾何学模様が書かれた円形の陣——所謂魔法陣があった。

なんか、目の前の美少女は所謂巫女さんっぽいし、足元の魔法陣、んでもって後ろの騎士っぽい奴らと中世っぽい雰囲気からするに、どうやら俺達は——召喚、されたりしい。

オタクの俺にはわかる。こんな雰囲気醸し出すのは異世界に召喚されたに他ならない。けど、なんで二人？ こういうのは普通、相場は一人だろう。

そういえばなんか穴っぱい何かに引きずられる時に、穴は俺じゃなくて積極的に光を飲み込もうとしてた気がする。だって明らかに俺より強く引っ張られてたもん。

……ん？ そう考えると俺って巻き込まれたんじゃないやね？ だって俺光に服捕まれて此処に連れて来られた訳だし。

「あの……君は？ それで、此処は？」

隣の光が目の中の美少女に聞いた。すると固まっていた美少女はみるみる顔を赤く染めると、慌てて喋り始めた。

あ、こいつ光に惚れたな。

「こ、此処はフィデイル王国の王宮内にある『召喚の間』と呼ばれる場所です。あ、貴方はこの世界の勇者として呼ばれたんです」

美少女の視界に入っていないことに痛恨の一撃！

俺はイケメン爆発しろとか思いながら美少女に質問した。

「なあ、名前は？ 俺達の一つていうか勇者の役目は？」

俺がそう言っていると美少女さんは初めて俺に気が付いたのか、物凄くびっくりしていた。……イケメン爆発しろ。

「私はフィデール王国第二王女の『ミリア・ミスリル・フォン・フィデール』です。それで、勇者の使命はこの世界に現れた魔王を倒すことです」

質問したのは俺なのに、何故か光の方を見ながら言う王女様。……ふっ、いいぜ、わかった。俺のことなんか眼中にないってか。イケメン、俺と顔変われ。

典型的なロープレの最終目標なんか示されたってちっとも面白くない。もっと別の役目くれよ。

「この世界は今魔王と魔王が放った魔物によって蹂躪され、危機に陥っています。人々の生活は脅かされ、魔物が外を闊歩する……貴方は、そんな世界を救うために神に選ばれて呼ばれた勇者なんです

よ
「

をい、クソ女。そんな光が大好きそんな話を光に振るな。うん
しか言わなくなるだろーが。

そして案の定光は――

「そうなのか……わかった、俺に何が出来るかわからないけど、呼
ばれたからには頑張るよ。任せてミリア」

そう微笑みながら言った。キラースマイルかよ。もう死ねよ。俺
のことも考えろよ。

「悠里もそれでいいよな？」

全身全霊で異議があります。

ブローグその2

「ミリア、俺達――」

「気安く呼ばないで下さい」

うつほほーい。光は呼び捨てスルーだったのに俺は注意されるのね。OK把握。俺の方針決定。

「そもそも召喚の儀で呼び出される勇者は一人しかいないんです。貴方は一体なんなんですか？ 勇者様の従者ですか？」

「俺は光の従者じゃない、幼なじみだクソ女。俺は光みてーにこんな世界救う気なんてねーしむしろお前の態度から壊したい。もちろん勇者なんてやんねーし、どっちかって言うと俺は魔王タイプの間だ。だから今すぐ俺を元の世界に戻しやがれ」

俺がそう言うと光が慌ててこっちを見てくるし後ろの騎士達は腰の剣を一斉に抜くしクソ女は肩をプルプルさせて怒り浸透みたいな感じになるしで、なんか面白い感じになってきた。

もっ少し挑発したらなんか起こるんじゃないかね？ ってな感じでもう

少し喋ることにする。

「そもそも自分達の世界のピンチは自分達で解決するもんじゃねーのか？ それをこんな見ず知らずの異世界人に頼るとか、情けねーとか思わねーの？」

俺がそう言った瞬間、クソ女の中でなんかキレたらしい。後ろの騎士に俺を討ち取るよう指示を出した。マジかよ。

騎士達が剣を構えて俺に向かってくる——というところで声が響いた。

「剣を収めなさい。その者は召喚の儀で召喚された勇者なのですよ」

凜とした女性の声。騎士達のさらに後方にあるドアが開いていて、そこになんかすっげー高級そうなドレスを着た水色の髪の女性がいた。良く見ると目も水色っぽい。

その人のおかげか、騎士達はおとなく剣を鞘に収めた。その様子から、どうやらあの人は王女よりも上の人らしい。ファンタジーな世界で王女より身分の高い女の人なんて俺は王妃しか思い浮かばない。もしくは女王。

「お母様！？ 何故此処に！？」

どうやら当たりらしい。目の前のクソ女が慌てている。

「思ったより強い波動を感じたからよ、ミリア。来てみたらびっくり、勇者が二人もいるじゃない」

「違います！ 勇者はこの方だけで、こっちの馬の骨は勇者でもありません！」

勇者の時に光を指して、馬の骨の時に俺を指してそう喚くクソ女。もうこいつぶん殴っていいかな？

「ダメだろ。今は堪えてくれよ、悠里」

イケメンが俺に耳打ちしてくる。うるせ、お前に俺の気持ちがかかるかリア充爆発しろ。

「けど、そのミリアが言う馬の骨も勇者様と一緒に召喚陣から出て来たのではないの？ だったらその馬の骨も勇者様と同じじゃない」

全力で否定させていただきます。

王妃？ は騎士達を下がらせるとクソ王女を押し退けて俺の前に来た。途中で光に礼をして。

「申し訳ございません、娘が粗相をして御気分を害されたでしょうが、あの子も召喚の儀で気が立っていたのでしょう。普段はあのようなことは言わないのです。何卒、お許し下さい」

そう俺に言ってきた。

……え？ どういう展開？ 俺は別に謝られるようなことはされてないんだが。ぶっちゃけさつきみたいなのは光といれば日常茶飯事だし、あんな騎士共なんか光がいれば問題無いし。

ま、謝られて悪い気はしないし、別にいつか。

「いや別に。怒ってねーし。なんか面白かったから問題無し。まあアンタの娘は再教育する必要があるかもしれんけど」

俺のこと無視するし。

「ありがとうございます勇者様。ところで、お二方のお名前を伺っても？」

終始笑顔で対応する王妃？ あーもうめんどくさいから王妃でいいや。王妃は、なんか掴み所がない人だ。こういう人間が一番苦手なんだよね、俺。

「俺は朝原光あさはら ひかるです」

そう言っ て礼をする光。

「俺は宮城悠里みやぎ ゆうりだ。ちなみに勇者なんてもんをやるとは一言も言っ てない」

俺がそう言っ と王妃は俺達二人と握手をした。

「ヒカル様とユウリ様ですね。ではお二人共、私に着いて来て下さい。これから王へと謁見していただきますので」

「わかりました」

「今から？　なんでさ」

対称的な俺と光の反応。おいおい光、お前は何面倒事に全力疾走で突っ込んで行ってんだ。そんな、お前王とかに謁見しちゃったら勇者確定で魔王倒しに行かなきゃいけないくなるじゃん。嫌だよ俺。全力で却下するよ？

「では行きましょう」

お、オヤオヤ？

そんな俺の反応も願いも無視して歩き出す王妃。もしかしてこの人は強引な人かもしれない。

普通に着いて行く光は俺に「行かないのか？」とか言ってくる。行かないのか、っていうか行きたくない。俺を元の世界に帰しやがれ。

光の横で俺を睨みながら王妃に着いて行くクソ王女。

俺の抵抗虚しく、俺は騎士達に両腕をガッチリ掴まれるとズルズルと引きずられるように連れて行かれるのだった。

部屋を出る時に一瞬、赤い髪の腰に剣を提げた女の剣士と目が合った。

第一章

今俺の前には王様がいます。もっと太ってる人間を予想してたのに、意外と細いです。この人は金髪金眼。どこぞの錬金術士を彷彿とさせます。

「そなた達が召喚の儀で召喚された勇者か」

「はい」

「いいえ、ケフィアです」

光があまりにも素直に頷くので、一発かましてみた。しかし王様は俺を完璧にスルー。以後光にしか声をかけなかった。

「余はフィデール王国国王『グレイセス・ミスリル・ガン・フィデール』だ。そなたの名は聞いておる。この国の勇者として、世界の希望として存分に働くがよい」

そう光に言う王様。名前にテイルズが入ってる気がしたが、スルーでいいこう。

「自己紹介が遅れましたね。私は『メイリン・マーズ・フォン・フィデール』です。よろしくお願いします」

何故か俺の方に目配せしながら言う王妃。なんか気に入られたっぽい？しかしマーズか……アクエリオンかよ。

というかなんだよこの状況。俺どんどん勇者の道を歩まされてる気がするぞ。あいつら俺の話聞いてくれないし。

「しかし勇者か……流石と言うべき波動の強さだな。これなら魔王も倒すことが出来よう」

波動とか……日本だったら中二病とか言われて馬鹿にされてるぞオッサン。

「そなたにはこれから目覚めの間に行ってもらう。そこでそなたの力を神に目覚めさせていただくのだ」

「はい、わかりました」

なんで光はこの流れをスルーできるの？ あれか？ 主人公補正

か？　こんなことにも主人公補正がかかんのか？

まあいいや。王様光しか指名してねーし。俺行かなくていいっぽい。やっと勇者コースから抜け出せるわ。

「もちろん貴方も行くんですよ、ユウリ様」

……このクソ王妃め。

なんか目覚めの間っていうのは召喚された勇者の潜在能力を解放する所らしい。騎士やらクソ王女やらに連れられて来たのは薄暗く中心にプールのように水が張ってある場所だった。

周りを見渡すと、またちらと赤い髪の女剣士が視界に入った。あいつさつきもいたけど、一体なんなの？　騎士ってわけじゃなさそうだし。

「ヒカル様には、これよりこの目覚めの泉に入って神と会話し、ヒカル様に眠るお力をお目覚めなさっていただきます。……その馬の骨もです」

「わかった」

光さつきからわかったとかはいとかわかりましたとかしか言っていない気がする。NOと言える日本人になろうぜ。

俺は返事をせずに目覚めの泉？ を眺めた。

綺麗に透き通った泉は円形で、岸から中心にかけてどんどん深くなっている。中心は淡く光っていて、そこには台座に刺さった剣みたいな物があった。なんかマスターソードっぽい。ガノンドロフも真っ青だな。

俺が眺めていると、クソ王女から説明が入った。

「ヒカル様には、泉の中心にある台座の剣に触れていただきます。そこで我等が神と対話していただき、勇者としてのお力を目覚めさせていただきます。その後、おそらく剣が引き抜けるようになると思いますので、その剣を引き抜いて下さい。御召し物は濡れる心配

は「ごいませんので、お気になさらずに」

「俺はどうすんの？ ヒカルが剣抜いちゃったらなんも出来なくなね？」

「知りません。自分でなんとかしてください」

おいおい、そりゃないぜ。神殿にボロボロのマスターソードが刺さってるならまだしも、現物が無いんじゃないやなんも出来ねーじゃねーか。

しかし主人公補正で正義に燃える光は俺とクソ王女の話なんて耳に入っていないらしく、早々に剣の所に行っていた。

中心は光の腰の辺りの深さがあって、光は水面に出ている柄を掴んだ。

すると突然剣がまばゆいばかりに光り出し、光はその光りに飲み込まれて見えなくなった。

第一章<一話>

光が光りに包まれて数秒。剣から放たれた光りが収縮して無くなると、光はおもむろに剣を抜いた。それまで石みたいだった剣は光が抜くとびしぴしと輝が入るような音を出すと、突然砕け散った。すると中から見た者を魅了してやまない程の美しい黄金の剣が現れた。

「神剣ランド・グリーズ——」

剣を見て光はそう呟いた。どうやらその剣の銘らしい。俺からしたらヴァルキリーの装備品の名前にしか聞こえないけど。まあ、気にすることじゃない。

隣のクソ王女や周りの騎士達は光の神々しい雰囲気当てられて呆然としている。そんな空気をもともしないリア充イケメンの主人公は戻って来て早々俺に「早く行けよ」とか言ってきやがった。

いやいや、剣とか無いのにどうやって神とやらと対話しろと。力を目覚めさせろと。俺はお前みたいな主人公じゃないんだから、なんかねーとダメだろ。

そんな感じのことを光に巻くし立てると、

（光に剣借りればいーんじゃね？）

という結論に至った俺は光にその旨を伝えようとしたところで、

「ぐずぐずしてないでさっさと行け」

「ひでぶっ」

という言葉と共に俺は赤い女剣士に蹴り飛ばされて目覚めの泉に強制ダイブさせられた。やっべ、鼻打ちそう。

気付いたらそこは真っ暗でした。

ふっ……俺に中二病的な舞台を用意するなんてなかなか気が効いてるじゃないか。俺はもう何が起きたって気にしないさ。そうさ、泉に落ちたと思ったのにこんな空間にいたって気にしないさ。目の前に光が持ってたはずの剣があったって気にしないさ。

そうさ、例え目の前に金髪碧眼のゴスロリ少女がいたって気にしない……って無視出来るかぁ!!

「その少女。此処はどこでお前は誰で俺は何だ」

あれ？　なんか自分のアイデンティティが危ぶまれる質問を自分でしたような……まあいいか。それよりも目の前の少女だ。

ぱっちりとした大きな目に長い睫毛。ふっくらとした赤い唇に形のいい眉。整った輪郭に幼さを残したかわいらしい顔立ちを際立たせる雪のように白く透き通った肌。背中辺りまで伸ばされた金髪は軽く巻いてあってフワフワとしている。

やべ、ロリコンに目覚めそう。

「わらわは主ら人間が神と崇める存在にして世界の創造主。そして此処は世界の裏側——わらわの世界じゃ」

くっ、こんな幼女まで中二病に犯されてるのか、どうなってんだこの世界は。

無表情で答えた幼女（自称神）に、俺はそんな感想を抱いてた。

「うん……？ 世界を作ったってんならなんで世界の裏側がお前の世界なんだよ」

とりあえずもう中二病うんぬんは置いて話を進めることにした。もうこの世界は存在自体が中二病だと思って諦めよう。というか納得しよう。

「わらわが創造した世界は主らのモノだ。わらわのモノではない。その代わりに世界の裏側をわらわが貰い受けた。それだけのことじや」

「……ふーん。まあ、そういうことにしといてやるよ。なんか納得いかなーけど、お前がそう言っんならそうなんだろ」

俺の言葉に幼女の眉がピクリと動いたが、華麗にスルーした。

そしてさっきから疑問に思っていたことを口にする。

「なあ……表の王女サマはその剣に触れてお前と話せって言うけど……その剣に触れなくていいのか？」

俺の言葉に幼女は呆れたように溜息を吐いた。溜息を吐きたいのはこっちだっつーの。

「主は先程の人間の若者と違ってわらわに対する敬意が一切見られんのう。些か教育が足りないんじゃないかなろうか……？ まあよい。そんな人間の王女の戯れ言などわらわには関係ない。わらわが話したいと思えばその剣を持たずとも人間と話すことが出来る」

こいつ光に会ってんのかよ。いや、神サマなら当然か。

第一章<二話>

「じゃあお前が話したくなかったら剣を持っても話せないってことか」

俺がそう言っていると幼女は嬉しそうに顔を綻ばせた。なにあれ超可愛いんだけど。ロリコンじゃないよ俺。一応言っとくけど。

「ほう……頭は悪くないようじゃのう。そうじゃ、主の言う通りじや。要するにその剣など関係ない。見た目の問題ということじゃ。ほれ、人間は見た目にこだわるからの。だからそのような世界が出来上がったのじゃ」

「いろいろと解釈出来る言葉だが……まあいいさ。それで、なんでお前は俺を此処に連れて来たんだ？ 何か目的があるんだろ、まさか世間話をするために呼んだんじゃないだろうし」

そう言つと、目の前の幼女は首を左右に振つた。

「何を言っておる。わらわは主を呼んでなどおらん、主が勝手にわらわの世界に入つて来たのではないか」

「は……？」

いやいや少し待て。ちよつとすぐ待て。俺が勝手に此処に入つて来た……？ 俺は別に此処に来ようと思つてねーし、蹴飛ばされて泉に落ちただけだし……あの女剣士がなんかしたのか？

「まさか……主は意図せず此処に来たというのか？ そんなことが……いや、でも……」

そんな感じになんかぶつぶつ呟きながら俺を見て何かに気付いたらしい幼女。顔がにやけている。

「そうか……その波動と魔力……主は邪神じゃな」

やっべ、遂に俺まで中二病に組み込まれちゃった。というかいきなり邪神で。魔王でも勇者でもなく邪神で。

俺異世界に来て早々神様の仲間入りですかコノヤロー。

「まじかよ。俺って邪神だったのかよ。主人公どころじゃねーよ、いきなり魔王越えちゃったよ」

「なんじゃ、主は己が邪神だということを知らなんだか」

「生憎、この世界に来たのが数時間前でね、この世界のことをなんも知らないんだよね」

「そうか……」

そこで考え込むように顔を伏せた少女。次に顔を上げた時、何故か少女の目はキラキラ輝いていた。

「主よ、邪神の力が欲しくないか？」

「欲しいけど……くれるのか？」

「正確に言うとおげるのではなく目覚めさせるだけじゃがな。そうか、邪神の力が欲しいか」

そこで少女の顔がニヤリと笑う。うわあ……あくだい顔だ。

「それでは主の邪神としての力を目覚めさせてやろう。そのかわり……わらわを主と共に連れて行け。それが主の力を目覚めさせる条

件じゃ」

「OK把握」

即答。

なんかめんどくさいこと頼まれると身構えただけに、あまりに表し抜けた内容にあっさり承諾。幼女は何故か驚いていた。

「なんだ？ 自分から言っというてなんでそんな驚いてんだよ」

「いや……まさかそんなに簡単に了承されるとは思わなくての……」

「そんなことより神様が簡単に邪神の存在とか許してもいいーのかよ？ 普通は全力で潰しにかかるような存在なんじゃねーのか？」

俺の疑問に幼女はそんなことか、と答えた。

「わらわは世界の事象に手出しできん。よって主の存在に干渉できないのじゃ。手出しできぬのなればこそ、主が何をしでかすかが見てみたいのじゃ。もう世界の裏側にいるのも飽いた。主と共に面白い

モノを見てみたいと思ったのじゃ」

「ふーん……俺や光の力を目覚めさせるのは世界の干渉とやらには含まれないのか？」

「決められた場所でのその程度のことなら問題無い」

なんか反則くせーけど……まあいいや。それよりも、

「どうやって邪神の力を目覚めさせるんだ？」

「簡単じゃ。その剣にカギが仕込んである。台座から剣を抜けば自然と目覚めるじゃろうて。まあ、普通はその剣は抜けないんじやが主なら問題なからう」

そう言っ て台座に刺さった剣を指差す少女。光も片手で簡単に抜いてたし、俺ももしかしたら簡単に抜けるんじゃないやね？ 少女もそういうニュアンスで言っ てたし。

そう思っ てた時期が俺にもありました。

第一章<第三話>

台座に近付いて剣の柄を掴んだ。片手だと抜けるかどうか不安だった。なので両手で思いっきり引き抜いた。

その瞬間、視界が真っ黒に染まった――

よくよく考えてみて欲しい。俺は今邪神の力とか言う言わばチート級の力を手に入れようとしている訳だ。そんな力が生半可な気持ちで簡単に手に入るはずもなく、ましてや俺は物語の主人公じゃない。主人公補正なんて微塵も期待出来るはずもなく、俺は力づくで邪神の力を手に入れないといけない訳だ。

しかしそんなことを言ったところで俺はただの一般人。RPG風に言うと村人Aの立場の人な訳だ。そんな俺に主人公補正も無しで特別な力が宿っているはずもなく、というかその特別な力を手に入れようともがいているのに、手に入れる前からそんな力を持ってい

る方がおかしい訳だ。

なんか簡単に手に入るんじゃない？ とか思ってた五秒前の俺を殴り飛ばして考えを変えさせたい。愚かな俺よ、その考えは間違っている……と。

「チックショー！！　こんなの聞いてねーぞ！」

目下全力で逃走中の俺の背後には全身真っ暗で蜥蜴が二足歩行して巨大化してついでに羽が生えちゃった感じの生物——所謂『ドラゴン』が迫って来ていた。このドラゴン龍神王に似てるんですけど！ 倒したら色が変わって再戦とか無いよね！？

リアル永遠の恐竜とか嫌だよ！？

「グオアアアアアアアア！」

「ちょ！？　マジ怖いんですけど！　助けて、ドラえもおおん！
！」

後ろから聞こえた大気を震わす程のドラゴンの号砲に、思わず青色の猫型ロボットの名前を叫ぶ。今ならドラえもんにも助けを求める

のび太の気持ちがわかるかもしれない。もつとも、ドラえもん本体よりも欲しいのは道具が入った四次元ポケットだけだ。それがあればドラミちゃんでも構わない。

手元にある武器は台座から抜いた剣のみ。抜いた瞬間光と同じような現象が起きたからコイツはもう石じゃなくてれっきとした剣だ。剣の銘は『魔剣レーヴァテイン』。邪神よろしく俺は魔剣を手に入れたらしい。神剣とか聖剣とかじゃないところがなんとも邪神らしい。

「どうした邪神の人間よ！？ 逃げ回るだけではドラゴンには勝てぬぞ！」

「五月蠅えええ！ こちとらドラゴンなんて初見だし、魔剣な使い方もわかんねーんだよ！ そもそもこいつ何！？ なんていきなり出て来た訳！？」

幼女に反論するように叫ぶ。ホントになにこいつ。俺が剣握ったと同時に現れやがって。何が目的なのさ、人間の肉なんて食っても美味くねーぞ！

「そやつは主の邪神の力の一端じゃ！ そやつを倒さぬ限り主に邪神の力は扱えぬぞ！」

「こんなの倒せるかああ！！ 俺人間！ 人間にドラゴンなんて倒せねーよ！」

「何のための魔剣じゃ！ それを使えばたやすいことじゃろーが！」

「お前人の話聞いてなかったな！？ 使い方わかんねーって言っただろーが！」

叫びながらも俺は走り続ける。叫んでるからか余計に体力が減っていくが、幸いにもドラゴンの足は遅いらしく追いつかれることはない。

「使い方なんぞ簡単じゃろーが！ ドラゴンに向かって思いっきり振れ！ それだけじゃ！」

「振ったらどーなのさ！？ 効果が期待出来なきゃ振れないよ！？」

「それは振ってからの楽しみじゃー！」

「ドあほおお！！ それでなんも起きなかったらどーしてくれんだ！ 普段ならただのイタイ人で済むけど今それだったら俺軽くあ

の世行きだからね！？ いや、あの世逝きか？ とにかく——つて、
嘘お！？ なんか飛んでるし！？ なんか吐いてきたああ！！！」

走っていても俺に追いつかないことに気付いたのか単に痺れを切
らしたのかはわからないが、ドラゴンは翼をはためかせると空を飛
んでこっちに迫ってきた。口から吐き出した黒い球体と一緒に。

「ほれ、さつさと降らんかああ！！！」

迫ってくる黒い球体。現実味のなさすぎる光景だが、間違いなく
現実だ。これに当たれば一発であの世に昇天だろう。

第一章<第四話>

なんかホントにマンガとかアニメのワンシーンっぽい状況に、不謹慎かもしれないが胸が高鳴った。もう中二病とかどーでもいいや。うん。俺も自分の中二パワーを発揮しよう。

立ち止まって振り返る。迫り来る黒い球体に向かって魔剣を振り上げる。

「こんな訳のわかんねー世界で死んでたまるか！俺は帰ってSTARDRIVERの続きを見るんだああ！！」

振り上げた魔剣を力の限り振り下ろした。瞬間、黒く光る斬撃が一尖。

あまりの衝撃に世界が割れた気がした。

黒い球体は真つ二つに割れ、その向こうにいたドラゴンも半分に割れていた。地面も一尖され、延々と亀裂が続いていた。

真つ二つにされたドラゴンはやがて黒い霧みたいになって霧散した。

「じゃから言つたじやろうが。魔剣を振れと」

「そーですね」

俺はあまりの力に呆然として、いいどもの観客の受け答えしか出来なかった。

「これで主の邪神の力は解放されたはずじゃ。どれ、一つ何か試してみんか？」

場所は戻ってさっきの台座の所。チート魔剣の力によって邪神の力を手に入れたらしい俺は、幼女に何かやってみせろとの命令を受けた。

俺いきなりチート級の力手に入れちゃったし。魔王とか余裕なん

じゃね？

「質問です神様」

そう言って手を挙げる。

「なんじゃ？」

「邪神の力ってどーやって使うんですか？」

なんか邪神の力が解放されたらしいけど、別段何かが変わった感じはしない。強いて言うなら幼女を神様と信じれるようになったとか。

しかしそれでは邪神の力の使い方がわからない。神様は魔剣の使い方も知ってたようだし、邪神の力の使い方も知ってるんじゃない？
的な感じで質問した。

「ふむ……能力の使い方は各々が勝手に使い方を覚えるのじゃが、
致し方あるまい。そうじゃな、邪神の力は……見たもの、こと、技
等を闇で再現することかの。要するに、今まで見たことがあるもの
総てが主の力じゃ。それで発動方法は……イメージじゃな。何がし

たいのか、何を作りたいのかを明確にイメージするんじゃ。それで後は魔剣が補正をかけてくれるはずじゃ。馴れれば魔剣無しでもスムーズに出来るはずじゃ」

「それってチートじゃないんですか？」

あまりの能力の凄さに思わず聞いてしまった。赤い弓兵の固有結界もビックリの驚愕の能力だ。

「問題ありません。仮にも『神』に分類される者の力じゃ、それくらい強くなくては神としての面目が立たん」

チートという言葉のスルーして意味を掴んでる少女をホントにこの世界の住人が疑った。

「んじゃあいつちよやってみつかあ！」

そう言っただけでイメージする者を考える。とりあえず見せるもんだからわかりやすいのがいいよな。ってことは何かを作り出した方がいいってことか。だとしたら少女にもわかりやすいもんを出した方がいいから――

「ほっ……」

幼女が首を上げて見上げる。俺がイメージしたのはさっきの龍神王に似たドラゴンだった。

とりあえず本物アピールとしてさっきの黒い球体を吐き出させる。ドラゴンは口を開けると黒い球体を発射した。

思っていたより操り易いな。

俺はドラゴンを消して幼女の方を向いた。

「——ってことで俺の用事は済んだんだけど。後はお前がどうやって俺に着いて来るかってことなんだけど……」

「それならば問題ない」

俺が口を開くと、幼女は自信満々にそう言った。俺が「なんで？」と疑問を口に乗せる前に幼女は俺に突進してきた。

「のっわっ！」

いきなりのことに対応出来なかった俺は少女との衝突の衝撃を覚悟したのだが………という訳か衝突の衝撃は来なかった。ついでに少女も消えていた。

「あれ……？ 神様……？」

『なんじゃ？ わらわなら主の頭の中におるぞ？』

俺が呟くと、頭のなかで少女の声が響いた。

第一章<第五話>

「……なんか変な感じ。寄生虫かお前は」

そう言うつと幼女が俺の目の前に現れた。

「神に向かって寄生虫とは失礼な奴じゃな。まあよい。これでわかったじゃろっ?」

「そうだな。……それじゃあ最後に自己紹介しようや」

「む、そういえばしておらんかったのう。あれだけ濃い時間を過ごしながら互いの名前も知らぬとはまた奇妙な話」

なんか誤解されそうな言い回しだが、此処には俺と幼女しかいないのでスルーする。文面だけ見たらかなりやばいけど。

「俺は宮城悠里。たつた今から邪神になった元勇者候補だ。周りから見たらまだ勇者候補っぽいけど、俺が邪神になったから勇者なんてパスだ。そんなめんどくさい役目は光がやってくれるさ」

「わらわはこの世界を造り上げし創造神にして世界の権利を奪われた女神。名を『ディアナ』という。これからよろしくな、主よ」

この幼女がホントにこの世界の住人が本気で疑った。

……しかし、世界の権利を奪われた、か……なんか面白そうなのになりそうだな。

俺とディアナ（俺の頭の中にいる）が戻ると、俺が泉に落ちてから殆ど時間が経っていなかったようで。

俺を蹴飛ばした女剣士足を振り上げたまま俺を見てきた。

俺と目が合うと人間とは思えないスピードで何処かに消え去った。あいつ結局何者だったんだ？

光は女剣士の存在に気付いてないらしく、俺が足を滑らして泉に落ちたと思っているらしい。いやいや、流石の俺でも突っ立ってる時に何も無い所で足を滑らしたりしないって。

「大丈夫か悠里？　ってなんか剣持ってるってことは神様に会って力を目覚めさせてもらったのか？」

「概ねそんな感じ。スゲー大変だったな」

ドラゴンのことを振り返りながらそう光に話す。すると光は少し怪訝そうな顔になった。

あれ？　俺変なこと言った？

「悠里……神様と話すことは確かに大変なことだけど、それが凄い大変って……いつの間にそんな駄目人間になったんだ？」

『ディ・ア・ナさん？　なんか光と話が噛み合わないんですけどお？』

ディアナとの会話は頭の中でディアナに話しかけようとすれば出来るってさっきディアナが言ってたからさっそく実行。

『主の力とそやつの力は違い過ぎる。例えるならレベル1とレベル99くらいの差じゃ。力が目覚める時の違いが出て当然じゃろう？
何もしないで神の力が得られる訳なかるうが』

正論過ぎて何も返せなかった。

それから光と喋っていると光の神々しさに当てられていた面々が
やっと気を取り戻した。

クソ王女は俺が持っている真つ黒の魔剣を怪訝そうに見ていたが、
元々光にしか興味なかったみたいなので早々に俺の魔剣を頭から追
い出すと光の事を褒め出した。

「凄い光の強さです！ 流石ヒカル様、きつと歴代の勇者の中でも
あれほどの光を持つ勇者などヒカル様を除いて他にはいなかったで
しょう。その光の強さはそのまま我等の希望の強さになるのです。
ヒカル様こそ勇者に相応しい！ ヒカル様ならきつと魔王も打倒し
て下さるでしょう！」

「アハハ、ありがとうミリア」

褒められて嬉しくない人間はいない。光もクソ王女に褒めちぎられて照れたようにそう返した。

改めて見て思う。リア充爆発しろ。

『主の頭の中はそんなことばかりじゃな……』

頭の中で何故か溜息が聞こえた気がしたけど、俺は気にしなかった。

王様の所に戻った俺達とはりあえず光のことを中心に報告するクソ王女の報告が王様と王妃に伝わるのを待って、従者の発表となった。なんの従者かって？ そんなの決まってんだろ、冒険のパーティーだよ。

まあ正直俺にはいらないけど。だって俺邪神だし。神様だし。ほぼ無敵じゃん。今なら世界中のリア充を撲滅できそうな気がする。

まあ当面の目標は魔王ぶっ飛ばすことだけど。ついでにリア充勇者も。

第一章<第六話>

従者は予め決めていた人と、勇者が予想外に二人出て来たので新たに選抜した人がいるらしい。ちなみに俺はケフィア発言で王様に嫌われてるっばいからどう考えても新しく選抜した従者が俺んところ来るっばい。

部屋をぐるりと見渡すと、従者が集まってるっばい所にあの赤い女剣士がいた。もしかしてもしかなくてもあいつって勇者パーティの従者か？

あの強さなら絶対光んとこのパーティに入るよな。どーでもいいけど。

俺と光はとりあえず王様の前で跪ずいてる状態。ホントはこんな格好疲れるしオッサンに払う敬意なんてこれっぽっちも無いから嫌なんだが、どうも王妃には逆らえない。

つまり俺は王様に跪ずいてるというより王妃に跪ずいてるという状態。王妃なら跪ずいてもいい気がする。何と無くだけど。

「これより、栄えある勇者のパーティを紹介する！」

玉座から立ち上がった王様がよく響く声でそんなことを言う。周りの貴族っぽい人とか兵士っぽい人達はおくとか言って騒いでいるけど、俺的にはどーでもいいのでちゃっちゃんと済ませてほしい。

「まずは勇者ヒカルのパーティからだ！ 一人目の従者は聖騎士『グレイス・ミール・フラシアス』！」

王様の言葉というか王様が言った名前に謁見の間が俄かにいきり立つ。

従者が集まっていた所から一人の女性が歩いて来る。一つに纏めた深緑の髪に切れ長の鋭い目。どこからどう見ても美人にしか見えないその女性は、光を反射する綺麗な鎧を纏って光の前までやって来た。

その人は王様に一礼すると光に向き直った。ちなみに光は王様から立ち上がる許可を貰っている、羨ましい。

「初めましてグレイス・ミール・フラシアスです。このフィディー王国で聖騎士をやらせて頂いております。これからよろしくお願いますね、ヒカル様」

『ディアナ、なんで主人公のところには美人や美少女が集まるのかな？』

『主人公補正というやつじゃないかの？』

笑顔でグレイスと握手する光。そのキラースマイルにグレイスは一瞬でやられていた。

……もう気にしない方向で行こう。その方が俺の精神への負担は少ないはずだ。うん、そうしよう。

『哀れじゃのう主よ……』

五月蠅い！

俺とディアナがそんな脳内プチ論争的なものを繰り返している間中、周りはずっと騒がしかった。

「あのフラシアスの聖騎士を従者にするとは……」「この国の最高戦力じゃないか」「王もそれほど本気ということだろう」

そんな空気を切り裂くように王様はまたよく響く声を張り上げた。

「二人目の従者は大魔導師『フィール・ラキアス・ユースアル』！」

そう王様が宣言すると、従者が集まる所から赤い派手なドレスで着飾った妙齡の美女が光の所まで歩み出た。妙齡の美女は長い藍色の髪をかき上げて流すと、藍色の瞳を瞬かせて光に挨拶をした。

「初めまして、ヒカルさん。私はフィール・ラキアス・ユースアルよ。気軽にフィールって呼んでね、勇者サマ？」

「は、初めまして……」

フィールの妖艶さに流石の光もたじたじだった。そのまま失態でも見せればいいのに。

『主よ、わらわが悲しくなるから止めてくれ……』

五月蠅い！

「大魔導師だと？」「国王はどれだけの戦力を魔王討伐に投入するつもりだ？」「大魔導師なんて世界中の魔導師のトップクラスの人

材じゃないか」

勇者のパーティの平均レベルは99なんですね、わかります。

パーティはだいたい四人が相場つてところだからあと一人はあの赤い女剣士つてところか。……ハーレムじゃねーか。死ねよイケメン。

『主よ……あやつは幼なじみじゃろう？』

そんなの関係ないね！

そんな俺とディアナを置いて王様は次の従者の発表に乗り掛かった。

「勇者ヒカル最後の従者は——」

第一章<第七話>

そこで王様は一息溜めると、今までで一番大きな声で従者の名前を発表した。

「『ミリア・ミスリル・フォン・フィデール』！」

一瞬会場が騒然となるが、一気にざわめきに包まれた。そんな空気をものともせず、クソ王女が光の所まで嬉しそうに小走りで駆けて行った。

「ヒカル様！　これからよろしくお願いしますね！」

「でも、大丈夫なの……？」

「私はこれでも聖職者なので治癒能力があります。問題ありませんよ！」

「そう、ならいいんだけどね。これからよろしく、ミリア」

「はい、よろしくお願いします！」

あり……？ あの赤い女剣士じゃない……？

『あの人間の王女には何も言わぬのじゃな、主よ』

『俺あいつ嫌い』

明確に答えを返す。あんなクソ王女なんかよりも赤い女剣士の方が気になる。光のパーティに入らなかつたことは必然的に俺のパーティに入るってことか。

……やっべ、超こえーんだけど。

『どうした、主よ』

ディアナの声に少し心配の色が混ざってた。

『あの赤い女剣士、光のパーティに入らなかつたことはつまり俺んとこのパーティに入るってことだよな……』

『ふむ……普通に考えればそれが妥当じゃな。して、それにどこか

問題でも？』

『俺あの赤い女剣士に蹴飛ばされてお前の世界に落っこちたんだよね。さっさと行きやがれとか言って問答無用で蹴飛ばされてあんな体験したんだ。つまりあいつが元凶な訳だ。怖がらない理由がない』

『主の女運の悪さには女神のわらわでも同情するぞ……』

『……ほつといってくれ』

そんなこんなで俺は今王様から立ち上がる許可を貰って従者の説明を受けている。どうやら緊急事態だったとかで従者が二人しかないらしい。別に俺からしたらどーでもいいけど、これって絶対王様が俺のこと嫌いだから二人しか用意しなかったんだよね。

……後で王様殺す。

「勇者ユウリの従者を発表する！」

さっきの光の時より幾分声に覇気がない。というかなんかおざなり。はいはい、どーせ俺は光の影ですよ、お飾りですよ。

「一人目は魔導師見習い『セシリ・フルール』！」

そう王様に言われてやって来たのはなんかちっこい推定十三、四くらいの茶髪な女の子だった。黒いローブをフードまで被って顔がよく見えないが、体格からして女の子。ただ手に持った杖が自分の身長と同じくらいある。

ここまで露骨に光と差を付けられるとは思わなかった。

女の子は俺の前まで来ると勢いよく頭を下げて俺に挨拶してきた。

「あ、あの、セシリ・フルールです……。よ、よろしくお願いします……！」

挨拶するだけでいっぱいという感じ。物凄く緊張しているのだろう、身体が少し震えている。

俺はそんなセシリの手を掴むと「よろしく」と言っただけでフードの下顔を覗き込んだ。

フードの下顔は茶色い大きな瞳と赤い唇。肩辺りで揃えられた

茶髪の髪と可愛い顔立ち。その顔に緊張の色を濃く滲ませる少女の顔があった。

『ふむ……ここまであやつの従者と差があると流石のわらわも憤りの感情が芽生えるぞ』

「あれは……魔導部門の落ちこぼれじゃないか」「王は邪魔な第二の勇者共々国のゴミを廃除しようとしているのか……?」「とんだ茶番だな、あんな従者などいてもいなくても一緒じゃないか」

「全部聞こえてるっつーの」

俺はそう呟きつつ王様……いや、もう王様とか呼ぶ気も起きねえ。クソオヤジの言葉を待った。

「二人目の従者は王国軍少尉『イリア・スカーレット』!」

クソオヤジの言葉に不機嫌そうに俺の方へ歩いてくる赤い女剣士。やっぱりあいつが俺のパーティに入って来るか。

赤い長髪をポニーテールに纏め、吊り上がった目は不機嫌そうにこちらを睨んでいる。雪みtainな白い肌に、赤い長髪と髪がよく映える。普通の顔をしていれば普通に美人そうな女剣士。

第一章＜最終話＞

「ふん……やつとまともに話せる機会が出来たな。私はイリア・スカーレットだ。これからよろしくな、『邪神』ユウリ」

イリアの言葉に思わず目を見開く。なんでこいつ俺が邪神だつてこと知ってたんだ？　いつから気付いてた？　泉ん時か？　それとも最初から？

『ディアナ……お前あいつが何かわかるか？』

『……残念ながら神の類ではないということしかわからん。じゃが、若干魔の気配を感じる』

『そうか……』

まあ、気にしてても何も進まない。とりあえずイリアの正体は頭の隅に追いやって挨拶をしておこう。

「泉ん時はやってくれたな。まあいいや、これからパーティになっ
ていろいろ活動すんだ。よろしくな」

そう言っ てイリアと握手する。手と手を握った瞬間、急激に手から頭へと『何か』が流れ込んで来た。力の奔流とも知識の奔流とも言えるそれは頭の中を渦巻いて唐突に消えた。

「奴は王国軍のお荷物少尉ではないか」「個人の能力はそこそこだが、集団戦闘が出来ないらしいな」「やはり王は王国のゴミを掃除したいらしい」

そりゃこいつは集団戦闘なんて出来ないだろうさ。個人の能力がそこそこのも抑え付けるのに精一杯だからだろ。

『ディアナ……お前もわかったよな？』

『ああ……じゃが主よ、何故あやつがこんな所に……？』

『さあね、俺が知りたいぐらいだよ。あの握手の時のあれはあいつが意図的に流したのかそれとも偶然だったのか……それはわからないけど、とりあえず見つけちゃったな』

目の前のイリアは不機嫌な顔のままだ。俺が握手をやめないからだろうが、そんなことに構っている場合じゃない。

なんか大冒険の末に見つけるってのがRPGの鉄則っぽかったけど……全部すっ飛んだな。

なあ？

『《魔王》イリア・スカーレット――』

第二章<第一話>

魔王と対面してから数時間。今俺は用意された部屋で思考に耽っていた。

用意された部屋はそこそ上等なのだろうが、光の部屋に比べると広さは半分くらいだし家具の高級感も幾分か落ちている。まあ俺はそんなに気にしないのだが、俺の脳内に巣くう寄生虫紛いの女神様は相当ご立腹のようだった。

『何故同じ勇者なのにこれ程の扱いの差を受けねばならんのじゃ……！？ 所詮人間の王が欲しがっていたのは強大な力ではなく、民の希望となる善良な弱者か！』

と、頭の中で怒りをばらまいている。元々人間に良い感情を抱いていなかったらしいディアナは今回のクソオヤジの一件で人間にキレたらしい。じゃあなんで人間の味方をしていたのかという話になるが、別に人間に加担していた訳ではなく決められた場所で力を求める者に力を与えていただけだとか。

だから、時には魔物（というよりは高い知能を持つ魔族）にも力を与えていたらしいし、魔王にだって力を与えたとか。

ただ、今回の魔王のイリアには今日初めて会ったらしい。

そもそもディアナいわく魔王という存在は実際には魔物の王という存在ではなく、最も強い力を持つ魔族の称号のようなモノらしい。故に魔王が魔物を放つとか増やすとか操るとかする訳ではなく、魔物は勝手に増えて勝手に暴れているらしい。

なので魔物の暴走を止め、魔物を減らす為に魔王討伐をするという人間の大義名分は事実を知っている者からすれば相当荒唐無稽らしく、魔族はおるか魔物ですら人間に興味は無いんだとか。

魔物が暴れるのは人間が自らの縄張りに入ってきた時だけで、普段はその辺の動物と変わらない自然の一部なのだ。だから悪戯に戦火を広げているのは人間であり、人間が今の領土で我慢し魔物の縄張りに入らなければ魔物と人間が争うことはほぼ無いと言っていい。

そう俺に説明してくれたディアナはふて寝を決め込んだらしく、今は不機嫌そうな寝息しか聞こえない。怒ってふて寝とか、随分人間らしい女神じゃねーか。

ディアナがふて寝したことで俺も暇になる。光の部屋は遠いし、あいつはメイドさんやら今日紹介があった従者やらが捕まえていて、到底話せる雰囲気じゃない。まあリア充はほっとこう。

そんなことよりもまずイリアの目的だ。

あいつは魔王。それはわかった。さっきのが意図的にせよ偶然にせよ、俺の正体を知っていることを俺にばらしたのだから、遅かれ早かれ正体を明かしていたのだろう。それが早まっただけと考えればいい。

ただ、なんでイリアがこんな所にいるのかわからない。ディアナの話から魔王城とかが無いことはわかってるけど、だからってこっち側にいる意味がわからない。

それに俺の正体も知っていた。そしてあんなに近くにいながら自分の命を狙う者達をスルーだ。いつでも殺すことが出来ただろうに相手にしていないだけなのか、それとも相手に出来ないのか。

どっちにせよイリアが相当力を持っていることは明らかだ。邪神の力を手に入れた俺に冷や汗をかかせる程の力だ。今の光なんざ一瞬であの世逝きだろう。

ディアナいわく歴代魔王の中でも最強かもしれない力らしい。そんなイリアが力を相当に抑えて人間の下に着いている。そして俺が召喚された場所について、邪神だと知っていた。今は俺の従者になっている。

……謎だ。もしかしたらイリアは邪神（俺）が召喚されるのを知っていて、一足先にこの王国に来たのかもしれない。そして士官して、そこそこの戦果で勇者の、正確には邪神の従者入りを狙う。

そう考えるといいのかもしれないが、いかんせん俺は光に巻き込まれてこの世界に来た人間だ。その俺がたまたま邪神だっただけであり、ホントに偶然この世界に来たのだ。言わばイレギュラー、ゲームで言ったらバグだ。

そんな確率的には圧倒的に低過ぎる出来事をわざわざ魔王自らが狙うだろうか？ いや、普通は狙わないはずだ。

もし仮にそうだとしても、魔王は一体邪神に何を求めたのか。あるいは何を求めるのか。

……謎だ。

第二章<第二話>

俺はベッドに座っていた体勢からそのままベッドに倒れる。圧倒的に情報が足りない。そもそも俺はこんなに頭を使うキャラじゃない。

疲れた。なんか後から夕食とかあるらしいけど、いらねーや。今日は何も食わんでも生きていける気がする。

このまま寝よーとか思ってた（魔剣はなんでもありの邪神の能力でどっかやった）ベッドの中心に這い寄ると、枕に頭を乗つけてダウン。そのまま落ちようかというところで、部屋のドアが控えめにノックされた。

「んあ……？ どうぞどうぞ……」

自分でも寝ぼけた声だとわかるような声で入室許可を出す。すると、ガチャリとドアを開けて最初に茶色の髪が頭を覗かせた。ついで黒いローブの裾が見えて、センリが入って来たのが確認できた。

「あれ……もしかして御就寝の直前でしたか……？ し、失礼しました……」

ベッドに横たわる俺を見てそう謝るセンリ。別に間違っちゃいないのだが、そうも自信なさ気に申し訳なさそうに謝られるとこっちが悲しくなってくる。もっと気楽に来てほしい。

「あー……いいいいいよ。そんな寝る直前とかじゃ無かったし、何か用事があつて来たんだろ？　ちゃんと部屋ん中入れよ」

「あ、は、はい。ありがとう、ございます……」

センリがベッドに近付いて来る。肩辺りに切り揃えられた茶色の髪が揺れる。よく見たら結構可愛らしい顔立ちしているが、その自信なさ気な表情で可愛さ成分が下がってしまっている。もったいない。

上体を起こしてセンリに顔を向ける。

「んで、なんだ？　飯か？」

「あ、いえ……確かにそれもあるんですが……そ、その……えと……あの……」

もじもじして続きを話そうとしないセンリ。けどそれは話すことが無いんじゃないかと、自分に自信がなくて口が開けないような、そんな感じだった。

「んー？ いいよいいよ別に。怒らないからなんでも言ってみ？」

「え……あ、はい……！」

出来るだけ優しくそう言うと、センリは幾分迷った後意を決したように口を開いた。

「ユ、ユウリ様……あの……差し出がましいかも、しれませんが……イリアさんには……その……き、気をつけた方が……いいと、思いますよ……」

「……なんでさ？」

突然のセンリの言葉についけんのんな声で返してしまった。声を出してからしまったと思い、センリを見るとビクツとなって涙目になってた。

やっべ、どうしよう！ 女の子泣かせちゃった！

「ひぐつ……だ、だって……その……ぐす……い、イリアさんから……その……ま、魔物と、似た気配が……したからあ……」

大粒の涙を目から流し始めたセンリを見て焦る。

ちよ！ パネエパネエパネエ！ 女の子泣かせるとかマジパネエんですけど！ 助けてディアナさん！

『知らん。それよりも注目すべきことがあるのではないか？』

マジパネエっすディアナさん！ ……って、え？ 注目すべきこと……？

「なあ……なんでイリアに魔物の気配があるって思うんだ？」

「ひぐつ……うえ……？ だって……私……こ、これでも……魔導師の……端くれですから……ぐす……魔の気配を探るくらいは……出来るんですよ……？」

『どういことですかディアナさん』

『ふむ……普通は人間に魔の気配など感じ取ることとは出来ないはずじゃ。しかしあの魔王のように何かを隠している様子も無し。残念ながら主の中における状態じゃその程度の考察しかできん』

うん……？ でもその理論じゃセンリが人間かどうか怪しくなってくるじゃねーか。どうなんそれ。まだ冒険も始まってねーのに俺のパーティ人外ばつかなのかよ。勘弁してくれよ。

『なあ、だったらディアナが外に出てセンリを観察すれば何かわかるのか？ そもそもこの世界でお前が出てこれるかどうかが問題だけど』

『主の力を使えば顕現出来るぞ。流石にわらわ一人ではできんが……主の力があれば問題ないじゃろ』

第二章<第三話>

俺が急に黙り込んだことを不思議に思ったのか、センリが泣きながら俺の顔を覗き込んでくる。意外と大きい瞳を瞬かせている。

「なあ……これからちよつとある人に会ってもらいたんだけど……いい？ ああ、怖い人じゃないよ。見た目はセンリよりちっちゃいしね」

「ふえ……？ ええ、いいですよ……？ でも、誰に？」

「神様」

不思議そうに聞いてくるセンリに端的にそう告げる。ビックリするセンリを尻目に俺はディアナのイメージを固くする。俺の中のディアナの力もあいまってそれは急速に形を持つていく。

俺の影がグアツと広がると黒く輝き出す。ズズツと影が盛り上がっていき、徐々にディアナの形を取っていく。その場面だけを見ればどう考えても女神というよりは魔族とか邪神とかといった輩の登場シーンに見える。

「ヒイ……！ な、何……！？」

完璧にディアナの形をとった影は一瞬光り輝くと、裏の世界で会ったディアナになった。

「まだまだ力に慣れていないのう、主よ。これほど顕現に時間がかつては戦闘時に主の力が発揮できんぞ」

「仕方ねーだろ、今魔剣が手元にねーんだから。魔剣があつたらもつとスムーズだったさ。というか戦闘ん時は魔剣があれば十分だろ」

センリの横にいきなり現れたゴスロリ少女を見て、センリが目を丸くしている。そんなセンリをディアナは興味深気にまじまじと見つめる。見つめられたセンリはビクビクしながら少し俺の方に寄ってきた。

「センリ、こいつはディアナ。この王国で所謂神として崇められているっぽい存在だ」

「所謂ではない。正真正銘神じゃ」

「え、あ……？ 神、様……？ この子が……？」

俺の言葉にセンリは微妙な表情でディアナを見た。こんな子が神様？　みたいな、疑っている目だ。ただ、いきなり現れたからメツチヤ怯えてるけど。

「まあこんな姿じゃからな、疑うのも無理はない。わらわとしては信じてもらわんでも結構じゃ。目的を果たせられればそれでよいのじゃからな」

「も、目的……？」

さっきからディアナに対して怯えまくりのセンリを見てると、こっちが哀れになってくる。どんだけ内気なんだよ。

「あー……大丈夫大丈夫。別にセンリの身体になんかしようって訳じゃねーから。そんなに怯えんなんて」

「ほ、本当……ですか？」

「場合によっては何かするかもしれんがの」

「ひっ……！」

ニヤリと笑って言うディアナ。

「怖がらせるようなことを言つなよ……」

このままでは埒が明かないので、とりあえずセンリを落ち着けさせる。この手の方法と技術は光の側にいると自然と身につく。光関連の女の子がよく泣くからだ。

その処理が俺に回って来るのはいかんせん納得出来なかったが、そのおかげで今こうやってセンリをあやすことが出来たので、今だけは水に流そう。

「ほら、センリ。大丈夫だからディアナとこ行けって」

「は、はい……」

センリの背中を押してディアナの所にやる。ディアナは腕を組んでその様子を見ていたが、センリが自分の前に来ると改めてセンリをまじまじと見ていた。

それから（身長的な問題で）少し屈むように言うと、ディアナはセンリの瞳をじっと見つめる。そしてディアナの右手の人差し指が光り始め、その光っている人差し指をセンリの額に当てた。

すると人差し指の光がセンリにじわじわと広がっていき、全身を覆ったところでパツと消えた。

「ふむ……お主、両親は？」

「え……あの……いない、ですけど……」

「そうか……」

そこで考え込むディアナ。幼女が難しい顔をして考え込む姿というのも乙なものだ。俺ロリコンじゃないけどね、念のため。

「なんかわかったのか？」

オロオロしているセンリはとりあえず放置してディアナにそう聞いた。

第二章<第四話>

こんな離れた状態でも頭の中のパイプはディアナと繋がってるらしい。頭の中にディアナの声が響いてきた。

『主よ。このセンリという小娘、半人半魔じゃ』

『なん……だと……!』

声だけで驚きを表現する。どっかの死神達がよく使ってそうな表現だったけど気にしない。

そんなことよりも、

『半人半魔ってことは……半分人間で半分魔物ってことだよな』

『正確に言えば半分人間で半分魔族じゃな。相手の魔族は限りなく人間に近い形をしてる。力はそれこそ桁違いじゃがな』

『それとお前が難しい顔してんのがなんか関係あんの?』

そう言うつと（脳内で）ディアナは俺にだけ見えるように微妙に頷いた。

『実を言うつとじゃな……本来ならば半人半魔などという存在はいないはずなのじゃ。いくら魔族が人型に近けれど魔族と人間の間に子供はできん。猫と犬との間に子供ができんようにな。じゃからこのセマリという小娘、本来なら存在しない存在ということじゃ。ちと表現がおかしいが』

「マジかよ」

思わず漏らしてしまった呟きに、セマリはこっちを見てくる。そんなセマリの顔を見て、俺は質問してみることにした。

「セマリってどこで育つたんだ？」

「えと……王都にある『トゥルゲン孤児院』っていう……孤児院で育ちました……」

「何処の鉱山だよ」

「え……？ 鉱山じゃなくて……孤児院……ですよ？」

「ああ、ゴメン。こっちの話」

ゲームのダンジョンの名前について呟いてしまった。ディアナはそんな俺を見て呆れている。

「んで、それってどういう所？ 孤児を育ててるとかそういうことじゃなくて、例えば……そうだな……職員の様子とか他の孤児の様子とか、あとは何処が支援してその孤児院が成り立ってるのか」

「どうして……そんなこと、聞くんですか……？ 私、何かおかしかったですか……？」

俺の質問を不審に思ったのかただ単純に意味のわからない質問が不安になったのかわからないが、センリがそう聞いてきた。目が不安そうに揺れながらも、一生懸命俺を睨むような視線を向けてくる。

俺がその質問に答えあぐねていると、またセンリが口を開いた。

「さっきの光……検査魔術ですよ……？ 一体私の何を調べたんですか……？ 何がわかったんですか……？」

「おいディアナ、なんか調べたってばれてるぞ。なんも言ってないのにはれるってどういうことだ」

「そんなことわらわに言うな。こやつも魔導師の端くれなら魔力の使い方と状況判断でそれくらい見破るじやろうが」

「マジか」

「マジじゃ」

「話を逸らさないで下さい！」

叫ぶようなセンリの声に一瞬ビクリする。今まで自信なさ気に小さな声で喋っていたセンリの突然の声に、俺とディアナはまじまじとセンリの顔を見つめた。

「話を、逸らさないで下さい！ 一体私の何を調べたんですか！？ 私って何かおかしいところがあったんですか！？」

なんか微妙にヒステリックになってるセンリ。どんな場面でもまいちシリアスに成り切れない俺の心をシリアスに染め上げる。

セリリの焦ったような不安そうな顔を見ると、こいつ過去になんかあったんじゃない？ と思えてくる。自分の存在に疑問を持つような出来事があったんじゃないかと。

まあ、俺は光じゃないからその辺のことはわかんないけど。

「なあ……なんだ？ その、まあ落ち着けよ。話を逸らそうとしたのは悪かった。ただ……なあ？」

そう言ってディアナに目配せをする。しかし非情にもディアナは俺と目が合うと速攻で逸らしゃがった。

ぴゅ、とか下手な口笛を吹いて一生懸命逃げようとしている。ふざけんなよ！？

「すみません……でも、私……こんなこと言ったら変かもしれないませんが、自分のこと全然知らないんですよ」

第二章<第五話>

俯いた顔でそう言うセンリ。

「親が誰なのかも知らないし……私が何処で生まれたかも……なん
で孤児院に居たのかも……全然、知らなくて……。だから、少しで
もいいから自分のこと知りたいんです」

顔を上げるセンリ。そこには、俺に懇願するような眼差しを向け
た少女の顔があった。

「孤児院の職員の人達には聞かなかったのか？」

「先生達は知らないって言って……何も……。だから私王宮に士官
したんです。王国の中枢に行けば何かわかるんじゃないかって、そ
う思ってた」

「そう、か……」

うーん……困ったな。センリの両親のことは一先ず端に寄せとい
て、問題はセンリの正体をセンリ自身に伝えてもいいかどうかとい
うことだ。勿論正体がわかってる以上いつかは伝えるし、伝える

前にばれるということも有り得るがそれは問題じゃない。

それなりの時間一緒にいれば俺のことも信用してくれるだろうから俺の話を信じてもらい易くなると思うのだが、いかんせんセンリとは今日初めて会ったのだ。初めて会った人に「お前は人間じゃない、存在しない存在だ」と言われても普通は信じない。

少なくとも俺は絶対信じないし、逆に真っ向から否定する。別に信じてもらえないのは構わないんだけど、俺自身がするように真っ向から否定されたらたまったもんじゃない。

というか、否定されてそのうえパニックられたら俺にはもうどうしようもない。メイドさんやら従者さんやらに捕まってるイケメンを連れて来なければいけなくなる。

リア充をさらにリア充にする事態は避けたいので、慎重に言葉を選んでいくことにしよう。どっかの女神さんはさっきから全力で目を逸らしてるから役に立ちそうにない。

「えーと、さ……？　とりあえずセンリは自分のことどのくらい知ってるの？」

「魔力が人より多いとか……成長が人より少し遅いとか……それく

らしいか……」

成長が人より少し遅い、だと……？ どう見てもセンリは十三、四くらいの中학생くらいの年齢にしか見えないけど、違うのか？

「成長が遅いって……センリって今何歳？」

「えと……十八……ですけど……」

「なん……だと……！」

あ、とうとう声に出して言うてしまった。ていうかそんなことよりも……え？ センリって……え？ そうなの……？

「センリって俺より年上だったのか……！？」

「どついう意味ですか……？」

やっべ、センリさんが静かに怒ってらっしゃる！ なんか妙に怖いんですけど！

全国の皆さん、此処に予想 G A Y……間違えた、予想外のロリ少女がいますよ！

じゃない、そんなこと言ってる場合じゃない。今俺は地雷一歩手前で止まってる状態なんだ。これ以上なんかやらかしてみろ。リア充のリアルをもっと充実させる結果になるぞ。

なんか怖い感じになってるセンリに声をかける。

「いや……なんか、ね？ こう、見た目とのギャップって言うかね？ 幼く見えるっていうかね、そのね？ わかるよね？」

「自分でもわかってるのに、他人に言われると傷付くんです！ この幼い容姿のせいでどれだけ私が苦労したと思ってるんですか！？」

はい詰んだ！ はい死にました！ 俺の限界をお知らせいたします！

涙目で怒ったように俺に言うセンリに、俺は自分の限界が訪れたことを悟りました。相変わらずディアナは役に立たないというか、いつの間にか姿を消して俺の頭の中に戻っています。

くそ……リア充に頼るしかないのか……！？

「いや、ホントすいません！　そうですよね！？　年齢と見た目が合わなかったら苦労しますよね！　マジすんません！　俺の配慮が足りませんでした！」

「成人してるって言っても信じてもらえないし、身長低くて嘗められるし、一番大変だったのは王宮に志願する時に宮士の方に全く信用されなかったことです！　とにかく、見た目のことは言わないで下さい！」

第二章<第六話>

「イエスユアハynes!」

喚くセンリを見て光を呼びに行こうか行かまいか迷って、結局行かずにその場が過ぎるのを待った。その間中、センリの愚痴をずっと聞いていた俺は内心で冷や冷やししながら「時よ、速く経て!」とか思いながら過ごしていた。

「それで、結局なんなんですか。話してくれるんですか?」

センリの態度が最初と大分変わったけど、まあいいだろう。むしろこっちの方が話が進め易いし親しみ易いからいい変化だと思うことにしよう。

センリの目が半眼になってて怖いなんて、そんなこと思ってない

しそんな事実もない。あるわけない。視線（死線）がビシビシ刺さ
つてても俺は認めないよ！

「あー……いや、俺は別に話してもいいんだけど……たぶん、セン
リが信じてくれないというか、衝撃を受けるといって……そんな感
じなんだよね。センリがそれでもいいって言うなら話すけど、俺が
言ったこととか否定しないでよね？」

「衝撃ってどのくらい受けて信じられないってどのくらい信じられ
ないんですか？」

「センリの実年齢と見た目くらいの衝撃とセンリが王宮に士官しに
来た時の宮土の心情くらい信じられない」

その俺の言葉にセンリは笑顔になって一言。

「殺しますよ？」

「全力ですいませんでした！」

すかさず日本人の最大の武器であるDOGEZAを繰り出す。
センリの笑顔は魔王よりも怖かったと思う。

「……それで、話して下さいですね？」

「ん、まあ……いいだろう。話した後お前がどう思つかはお前次第だから俺に絡んでくるなよ」

「はい、わかりました」

俺の言葉が真面目な言葉だと受け取ったのか、神妙な顔になって頷いた。釘も刺したし……まあ、いいよな？ 話しても。

「センリ、お前はディアナいわく——半人半魔、らしい。半分は人間だが、半分は魔族だそうだ」

「……は？」

呆然とするセンリ。

その反応は当然かもしれない。人間と同じ容姿で人間の国で人間と同じように育ったのだ。両親もいない。自分のことを教えてくれる人もいなかったのだ。

自分が人間だと思って育ってきたのだ。センリからしたら自分の存在を根底からひっくり返されたようなものかもしれない。

「本当なら存在しない存在……それが半人半魔だつて。俺はこの世界のことがよく知らないけど、神様が言ってたんだ。そうなんだろうさ」

「そう……なんですか……」

そう呟いて、センリはそのまま押し黙った。何かを考えているように見えるし、何も考えていないようにも見える。その辺のことは本人に聞かないとわからないけど、まあ聞く気もないからどっちでもいいか。

絡まねければそれでいい。面倒事は嫌いだ。

「そう……なんですね……、はい、わかりました」

まあ絡んでくる気配も無いし、落ち着くまで頼っておけばいいだけ——って、え？

「今、なんて？」

俺がそう言うと、何故か不思議そうな顔をして俺の顔を覗き込んできた。

「ですから、わかりましたと。どうしたんですか？」

「いや、あまりにもあつさり頷くもんだからさ。もつと取り乱したり詰め寄って来るもんだとばかり思ってたから意外で」

「そんなこと……第一ユウリ様が言ったんじゃないですか。凄い衝撃を受けるし信じられないことだって。それと俺に絡むなとも。私はその言葉で心構えを作ったんですよ？」

ちゃんと俺の話を聞いていたから心構えが出来ていた、と……。

やっべ、この子メツチャええ子や……！ 人の話を聞かないあんなクソ王女なんかよりもよっぽど出来た子や！ 俺より年上だけど。俺感動。

『ええ子じゃな。主なんかよりもよっぽど出来た人間じゃな』

今まで何してやがったんですかディアナさん。よくその口で俺に

そんなことが言えますね。

「ふう……じゃあセリは俺の話を信じるのか？ 自分で言うのも
なんだが、勇者って役目以外俺って相当怪しい人間だと思うぞ？」

第二章<第七話>

異世界人だし。

「こんな私の為を思っ下さるユウリ様を疑う心など私にはありません。異世界人だろうがなんだろうが、例え周りの人がユウリ様のことを怪しいと言っても私はユウリ様を信じます」

「……簡単に人を信用し過ぎじゃないのか？」

たぶん俺は今苦い顔をしているのだろう。自分でそう思うくらいには顔の筋肉が動くのがわかった。

昔人を簡単に信用して酷い目にあった（光関連）から、センリにそう言う。しかしセンリは俺の言葉に花のように笑うと言った。

「それでも考えて信用したんですよ？ 小さい時から観察力だけはあるって言われてますから」

「そう、か……ありがとな」

「いえ、そんな！ 私はユウリ様の従者ですから！」

俺がお礼を言うと、途端に慌て出すセンリ。首を左右に振って両手をわたわたさせている様子を見るとなんだか笑えてくる。

まあ、なんだか結局いい感じになったし、終わりよければ全てよしってことにしとくかな？

俺はそう思ってたセンリに「これからよろしく」と言った。

「それで、話が一番最初に戻るんですけど……」

あれから少ししてセンリがそう話題をふってきた。

一番最初って言うと、えーと……

「——飯の話だっけ」

「違います」

一瞬で否定された。

『主はたわけか……？』

五月蠅い、ちょっとボケただけだ。

「ゴメンゴメン、えっと……イリアに気をつけろって話だっけ」

「そうです。イリアさんから魔の気配がしたって言いましたよね？
魔の気配って言うのは簡単に言うとは魔物達から感じるオーラとい
うか、魔力というか、そんな感じのものなんですよ。それが——」

「いや、もういい。イリアについては問題無い」

朗々と喋るセンリを遮ってそう言う。センリは自分の台詞が途中で切られたことで一瞬不機嫌になったが、俺の言葉を頭に吸収する

と怪訝な顔になって俺にどういうことが尋ねてきた。

「俺はあいつの正体を知ってる。イリアが警戒するのもわかるが、俺に対して何かをしてくるような感じじゃないから問題ないよ」

俺に何かをしてくるつもりだったらわざわざ俺に俺の正体を知っていることをアピールしてこないだろう。あの握手の時の知識は謎だけ。

「えっと、イリアさんの正体って？ 人間から魔の気配がすることなんて普通は無いんですけど……もしかして私と同じ、とか……？」

イリアの正体が気になるのか、センリがそう聞いてくる。まあ、隠してもすぐにばれそうな事柄なのでセンリに早めに伝えることにした。……問題無いよね？

『うむ、問題無かるう』

女神様からのお許しも得たので、話す。

「違うよセンリ。イリアは半人半魔じゃなくてそのものだよ」

「そのもの……?」

「そうだ。つまり、イリアは魔族ってこと。しかもただの魔族じゃねーんだな、これが」

「ただの魔族じゃないって、どういう……? ま、まさか……!？」

俺の言い回しで俺が言いたいことがわかったのか、センリが顔を驚愕に染める。普通はそんな考えなんて浮かびそうに無いけどな。センリって頭良いのかな。

俺はセンリの言葉に頷くとそれを言葉にした。

「そうだ。イリアは——魔王だ」

「そ、そんな!」

「おっと、ストップだセンリ。取り乱すな」

イリアの正体に取り乱しそうになったセンリにそう声をかける。俺の声がちゃんと届いたのか、センリは取り乱すことなく落ち着い

てくれた。

落ち着いたはいいが、センリの目はひしひしと俺に訴えかけてくる。「魔王を討たなくていいのか？」と。

「そんな目すんなって、大丈夫だ。俺が死ぬことにはならないし、イリアだってこっちから何かしない限り何もしてこないさ」

「けど、魔物を放っているのでは？」

「あー……それが。ちょっと俺の話を聞いてくれるか、センリ？」

どこか納得がいけないといった顔のセンリに俺はディアナから聞いた魔族の話をすることにした。

第二章<第八話>

「かくがくしかじかって訳なんだよ」

「ふざけてないでちゃんと話して下さい」

チクシヨウ！ マンガみたいにかくがくしかじかで伝わらないのか！

仕方なく俺は真面目に、それはもう初期のまん太もビックリするくらい真面目にセンリに説明した。たぶん説明してる時の俺は咄嗟に万辞苑を使うくらいに真面目だったと思うね。

「そんな……それじゃ勇者なんていないじゃないですか！ 人間が魔物を襲わなければいがみ合うことなく平和に暮らせるんですよ！？」

「そつだな」

「だったら！ 今すぐ王に報告を——」

「待て」

慌ててクソオヤジの所に報告に行こうとしたセンリを止める。センリはなんで自分が止められたのかわからないのか、俺を睨みつけてくる。そんな視線で喜ぶのはロリコンだけだ。

「なんで、止めるんですか!？」

「落ち着けて。お前はこの短時間で何回俺に落ち着けて言わせるつもりだよ」

「ですが!」

「だあー! いいから止まれって!」

俺の制止を聞かずに部屋を飛び出そうとしたセンリに向かってその声を上げる。一瞬センリがビクってなったが仕方ない、今のコイツはなんか知らんが冷静さを欠いてる。

普通に考えて気付きそうなことに気付いてない。

「いいか、よく考えろ。あのクソオヤジがお前の言葉を信じると思
うか？ 思わねーだろ。そもそも自分の立場を考えろ。この城に來
て一日も経ってねえ俺でも知ってるぞ、お前が落ちこぼれの魔導師
だってことを」

「ですが、それとこれとは話が別――」

「いいや、別じゃないね。あのクソオヤジがどうかは知らないが、
世間つてのは風評やら噂やらを結構重視する。お前が落ちこぼれ魔
導師なんて呼ばれてる限り、少なくとも上の奴らはお前の意見なん
か聞き入れてくれねーぞ」

そこでセンリが押し黙る。何かそんなような体験でもあったのだ
ろう、逡巡して結局は行くことを止めた。センリは不満げに溜息を
つく。

「いい判断だ。今は大人しくしてろ。ってかぶっちゃけ今その考え
が広まると俺の幼なじみが失業者になっちゃうんだよね」

「あ……」

俺の言葉に申し訳なさそうに目を俯かせる。光が失業イコール俺
も失業という考えに到ったらしい。別に俺は問題無いんだけどね。

とりあえず一段落着いたところで、センリの特技とも言える魔の気配を探る技に対して忠告しておくことにした。

「そう言えばセンリ。お前が魔の気配が探れるってことを知ってる奴って俺の他にもいんのか？」

「えと……他の人にも何度が言ったことあるんですけど、皆信じてくれなくて……。魔導師の基本的なスキルだと思っんですけど」

「よし、わかった。だったらもう誰にも言うなよ、その力のこと」

俺の言葉にセンリが不思議そうな顔をする。

「なんでですか？」

「普通人は魔の気配なんて感じれない。あくまで感じるのは魔力であって、それが魔物かどうかなんてのは判断がつかねーんだよ」

魔力の大きさとかで判断してるらしいけど、そんな不確実な方法じゃ全然信用出来ないし。たぶんセンリは半分魔族だから魔の気配が感じられるんだろうな。

「それは私が半人半魔だということと関係してるんですか？」

「どうだろうな。何とも言えん。センリの特異体質なのかもしれんし、魔族のことが関係してるのかもしれん。まあ、そんな考えてもわからんことは仕方ない」

そこで俺は言葉を一旦切って、念を押すためにもう一度センリに釘を刺す。

「とにかく、だ。その力のこともう誰にも言うんじゃないぞ。もし御偉いさん方に目をつけられでもしたらめんどくさいからな」

「……わかりました。気をつけます」

「ところでセンリ。お前大分俺に対する態度変わったけど最初のあれはなんだったわけ？」

第二章＜最終話＞

するとセンリは少し恥ずかしそうに頭をかいた。

「えつとですね……私、人見知りが激しくて……慣れてない人相手だどうしてもあんな感じになっちゃうんですね」

「じゃあ今は俺に慣れた、と？」

「そうですね。ユウリ様とっても良い人ですし」

そう言って笑顔に向けてくるセンリの顔が眩し過ぎて直視出来ない。なんてことだ。

『主の心の中はわらわが悲しくなるほど汚れきっておるからのう……』

『五月蠅い！ 仕方ないだろ、リア充が悪いんだよ！』

『主の性格にも問題あると思うがの。主、センリの笑顔を見て内心で「ふつくしい……」とか言っておったではないか』

『な、なぜそれを……！』

『主の頭の中におるんじや。主の内面のことなど全て御見通しよ。勿論、主のあのまんがとかあにめとからのべとか言うやつ知識もな！』

『俺にプライベートは存在しないのか……！？』

『わらわに憑かれたんじや。そんなものあるわけ無からう！』

高らかに頭の中で笑うディアナ。駄目だコイツ、早くなんとかしないと……！

とりあえず今はディアナのことは置いてこう。後でコイツとはジツクリ話し合わなければいけない。主に俺のプライベート空間とヲタ知識に関して。

そう言えば飯の時間だった気がするけど……まあ俺は食べなくてもいいんだけど、セリリはいいのかなあ。

「セナリは飯食わなくていいのか？」

「え？ ああ、そういえばご飯の時間でしたね…… といつてももう過ぎてしまいましたけど」

セナリが来てから結構話してたもんな。そりゃ、時間も過ぎるか。誰も呼びに来ないのはアレだけど、まあいつか。誰か来てもめんどくさいだけだったし。

「じゃあ飯どうすんだ？ といつても俺は無くても構わないんだけど」

「食堂に行けば何か貰えると思いますよ。私が呼びに来た食事の時間というのは、もう一組の勇者様達との会食みたいなものでしたし」

「それって行かなくても問題ないわけ？ 御偉いさん方が来たりとかは？」

「さあ？ でも元々行くつもりはなかったんでしょう？ だったらそんなこと聞いてこないで下さいよ」

なんかセナリが刺々しい。俺の最初の姿を見てたからか、俺が元々行く気がなかったのを見抜いているらしい。

「それに――」

そこで一旦言葉を切るセンリ。何故か俺に向けてニヤリと笑いかけってくる。

「私、あの人達嫌いなんですよね」

言葉を失う俺。まさかセンリの口からそんな言葉が出て来るとは思わなかった。

それから笑いが漏れてくる。うんうん、いい奴だなセンリは。

「お前とは気が合いそうだよ、センリ。これからよろしくな!」

「はい! よろしくお願いします!」

センリと握手をする。それと同時に、センリのお腹がくうくと可愛らしく鳴った。

「あ、あの、これは……！」

俺は恥ずかしそうに頬を染めて慌てるセンリの頭をぽんぽんと撫でて、立ち上がった。

「くっくく……んじゃあ食堂に行くか。俺も腹減ったしな」

「さっき食べなくてもいいって言ってたじゃないですか！」

「気分が変わったんだ」

なおも恥ずかしそうにするセンリを引き連れて、俺は食堂に向かうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0506r/>

俺と幼なじみが勇者になった件

2011年2月25日00時02分発行